

組織目標評価報告書（平成24年度）

部局名: **文学部**

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>①-1 目標</p> <p>①施設改修に対応した教育体制の点検・配慮 平成23年度末に文法経1号館の耐震改修第一期工事が完了し、それをうけて4月早々には移転作業、さらに夏には二期工事とそれにむけての移転作業が予定されている。移転作業や工事期間が授業期間とも重なるため、通常通りの教育が困難な状況もあるが、教室の変更措置や確保、学生指導のあてなど、事務方も連携しつつ、学生の勉学に不利益を与えないよう十分な配慮と工夫をおこなう。</p> <p>②学生サポート体制の充実 メンタル・ヘルスサポート体制の充実、キャリア支援に関する基盤整備</p> <p>③国際交流の推進による新たな教育の構築 キャンパスアジア事業やグローバル人材育成事業とも連携しつつ、異文化理解教育・留学生との交流・海外大学との新たな交流協定締結のための準備をすすめる。</p> <p>④学芸員資格制度の大規模改正に対応した体制整備と確立 平成25年度から大規模改正になる学芸員課程の教育が開始されるが、他学部とも連携しつつも文学部が中心となって実施体制の点検・確立、および科目内容の細部の具体化を行う。</p> <p>⑤学部における外国語教育のありかたについての検討 全学におけるグローバル人材育成事業の推進という動向をみすえながら、英語はもとより初習外国語についても、副専攻コースのありかたも含め、文学部における外国語教育の体制を点検し、新たな方向性をさぐるべく検討を開始する。</p> <p>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>学生による授業評価。 留年・休学・退学者数 学年次ごとの単位取得状況。 留学プログラムの整備。</p>	<p>自己評価</p> <p>①施設改修に対応した教育体制の点検・配慮 改修に関わる移転作業や工事期間中、通常と異なる授業や事務処理にあたっては、順調に対処することができた。また改修を機に、新たに学生が集えるリフレッシュルームを設置し、その運用方式を整備したほか、全学スペースを活用して学生相談ルームをもうける方向で計画を策定した。</p> <p>②学生サポート体制の充実 障がいのある学生へのきめ細かな指導の成果もあって、今年度、岡山県教員の障害者枠第1号の合格者をだすことができた。全学キャリアセンターと連携して、ハローワークの職員に4年次生で就職未定の学生を対象にした相談ルームを新たに設け、就活のサポートを行い成果を上げた。また、新しい試みとして卒業前の学生を主たる対象にして労働法制セミナーを実施した。</p> <p>③国際交流の推進による新たな教育の構築 文学部が独自に協定を締結しているフランス・ポルドー大学、ドイツ・ボーフム大学との留学交換は堅調であり、徐々に教育効果を上げている。さらに人文社会系のなかで、文学部が先頭に立ち山東大学政治・公共管理学院とのあいだで部局間協定を締結し、新しい交流の可能性を拡大した。留学のための手順マニュアルを語種ごとに策定し、学生の留学の便をはかった。また、ドイツ留学を促進する説明会を実施し、総領事館領事やドイツ学術交流会からも参加してもらった。</p> <p>④学芸員資格制度の大規模改正に対応した体制整備と確立 新たに学芸員課程の教育全般をマネジメントする役割をになう専門教員を採用し、その教員を中心として学芸員課程教育に対応するとともに、その授業内容の点検と充実を図った。</p> <p>⑤学部における外国語教育のありかたについての検討 英語・ドイツ語・フランス語・中国語・日本語の語種ごとの担当教員と執行部で話し合いの場を設定し、語種ごとの現状と課題について情報交換を行い、問題の共有をはかった。こうした活動と並行して、国際協力教員の位置づけを再検討し、その将来展望をもとに人事計画を立案した。また、新しい選考方式と性格付けをおこない英語学教員の公募を実施した。また、一部の語種については全学からの財政補助を受けて外部検定試験について積極的な支援をはかり、その効果測定を分析した。</p>
<p>②研究領域</p> <p>②-1 目標</p> <p>①耐震改修工事をうけての研究体制への配慮 平成24年度早々、第一期工事終了後の移転作業が予定されており、さらに夏以降には第二期工事にむけての移転作業が必要となる。通常の授業をおこないつつ作業をすすめるなければならないため、研究環境の保全などに十分な配慮と工夫を行う。また改修後の全学スペースを有効活用するための研究プロジェクトの具体化をはかる。</p> <p>②文学部共同プロジェクトの推進 第2期中期計画において学部として継続的に推進している複数のプロジェクトに財政的支援をおこなうなどして研究活動の充実を図る。</p> <p>③研究成果の集約と整理 文学部教員の研究成果を集約し、公開のための体制を整備する。</p> <p>④研究体制および組織についての点検 言語センターへのポスト返還が完了間近になったことをうけ、今後の新たな教員組織の体制について検討作業をすすめる。</p> <p>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>科研費申請率(全員申請にむけて前年度よりも向上を目指す) 公開シンポジウム・フォーラム・ワークショップなどの開催 共同研究の実施状況</p>	<p>自己評価</p> <p>①耐震改修工事をうけての研究体制への配慮 第一期工事後の移転、第二期工事およびその後の移転作業を順調に遂行することができた。また、改修に際し、希望に応じて教員研究室に書籍落下防止装置を設置するようにし、地震対策を独自に行った。そのほか無線LANの整備も行った。改修後の全学スペースの利用法についても意見をとりまとめ、計画案を策定した。</p> <p>②文学部共同プロジェクトの推進 文学部の3大プロジェクト、第二期分の最終年度にあたり、「人文学フロンティア2012」としてそれぞれ公開の講演やシンポジウムを実施し、成果のとりまとめにむけて準備をすすめた。</p> <p>③研究成果の集約と整理 改修工事後の部屋の配置を検討するなかで資料室のためのスペースを確保し、整備のための準備をすすめた。また教員活動調査作成の手順と時期について改善をはかり、教員の活動について情報管理の合理化・有効化をはかった。</p> <p>④研究体制および組織についての点検 言語教育センターへのポスト返還を前倒しで実施し、語学教育に関して語種ごとに担当教員と執行部との間で現状と問題点について話し合い、現状を検討した。これを踏まえて一部語種では将来的にネイティブ教員を文学部定員のなかに配置する方向性を打ち出した。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>③-1 目標</p> <p>①各種公開講座の継続・充実・発展 引きつづき、文学部、社会文化科学研究科、全学、および学外の市民むけ公開講座を積極的に展開する。</p> <p>②研究成果を市民へ公開する講演会・シンポジウムの開催 昨年度の活動を引き継ぎ、研究成果を市民に公開する講演会・シンポジウムを開催する。</p> <p>③広報活動のための情報収集の合理化と充実 学外にむけて文学部の諸活動を伝える広報活動を充実させるため、情報集約の合理化と、ホーム・ページなどへの適切な反映の方策を工夫する。</p> <p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p> <p>海外大学との協定 市民向け公開講座の実施 岡山地域の自治体などとの連携 地域貢献への協力</p>	<p>自己評価</p> <p>①各種公開講座の継続・充実・発展 文学部公開講座としては「歴史における環境と人間-考古学・歴史学研究の最前線」を実施。100人近くの参加者があり、好評を博した。このほかにも付属図書館池田文庫の公開展示などにあたっても中心的な役割を果たした。</p> <p>②研究成果を市民へ公開する講演会・シンポジウムの開催 上記項目②で述べた三大プロジェクトのほかにも、文学部教員が行っている研究成果にもとづいて各種講演会やシンポジウムを実施した。新たな試みとして、まちなかキャンパスを会場とした「現代セルビア美術を語る」ではセルビア大使館文化担当官などの参加協力を得た。このほか高麗大学の複数研究者を招待しての合同シンポや、東北から九州までの関係者を一堂に会して「大規模自然災害に備える」という公開フォーラムをおこない、多数の市民参加を得た。</p> <p>③広報活動のための情報収集の合理化と充実 活動情報の収集を体系的にはかれるようにフォーマットを作成し、情報の収集合理化をはかった。またHP管理者にきちんと伝えることを教員にあらためて周知した。DVDの改訂版を作成する準備をすすめた。</p>
<p>【総括記述欄】</p> <p>個々の教員の活動を効果的に集約し、また互いの活動状況に対する認識を深められるようにするために、教員活動評価調書の作成時期・手順を見直し、年度の変わり目にいち早く作成する方向で準備を進め、なんとか実現するはこびとなった。このことによって、個々の教員は自己目標管理と新年度にむけての課題の把握が、より実質的な形でおこなうことができ、部局・とも教員活動の成果を年度早くから把握できる見通しがたつた。 また部局内の委員会の再編をおこなうことで整理・合理化をはかり、必要な委員会については機能強化もおこなった(留学生専門委員会→国際交流委員会)。また将来構想の検討は引き続き進行中で、しだいに具体化をはかる段階に至っている。</p>	